

Title	<書評>太田秀通著 『東地中海世界』 : 古代におけるオリエンとギリシア
Author(s)	大西, 陸子
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1978), 61(5): 795-799
Issue Date	1978-09-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_61_795-1
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

太田秀通著

『東地中海世界』

——古代におけるオリエントとギリシア——

大西 陸 子

一

太田秀通氏が積年の研究成果を傾注されたこの著書は、ミケーネ時代からビザンツ帝国時代にいたる「東地中海世界」という、途方もなく大きなテーマに挑んでいる。著者が「序」の中で述懐しておられるとおり、このテーマをまとめる為には是非とも通らなければならぬ古典史料・碑文（銘）・パピルス文書等の資料だけでなく、膨大であるが、研究書・論文のたぐいとなると、無数と言っても過言ではない。氏の言葉を借りれば、このようなテーマと取り組むことは、まさにジャングル脱出行であるが、この冒険をあえておかさされた氏の勇氣と忍耐力には、心からの敬意を表さなければならぬ。細部にわたっての批判はさておき、わが国の古代史学界において、このように視野の広い著作が世に問われたことと自体が、評価されてよいであろう。

この、時間的・空間的に極めて大きな広がりをも、一人の人間の限られた能力の範囲で描き切ろうとすることは、本来不可能に近い。まして、通史的な構成の下に限られた枚数で、各社会の構造を、資料を引用しながら細かく検討することによって性格づけようと試みるのであるから、記述の密度にややむらがあることは、

やむを得ないと言えよう。また、内容について見ると、それ自体長い論争史を持つ問題が相当数含まれているので、それらすべてを個別に論じる余裕はないし、各章の論点を絞ることも困難なわけであるが、今一応、この本の大まかな構成を紹介しつつ、重要と思われる問題のいくつかに触れてみたいと思う。

二

まず、序章「問題提起」の冒頭で、著者は自らの問題の出発点が、近代市民社会の労働者が一切の隷属的身分と生産手段から解放された自由な抽象的個人であるという、現状であるとして、問題意識を明確に打ち出している。わが国の古代史研究者の中で、このような立場性を明確に標榜している者は、必ずしも多くはない。現代社会を起点とし、史的唯物論の認識論を基礎とする、氏のこの歴史観は、特定の世代の研究者に非常に顕著に見られる傾向であるが、氏の一貫した研究姿勢と叙述に際しての強い信念は、当然ここに由来するものである。

第一章「東地中海世界の形成」は、紀元前二千年紀中葉から後半にかけて、即ち、ヒクソスのエジプト侵入から「海の民」の侵略までの時期を扱っている。氏によると、エジプト新王国の帝国主義的アジア政策、ヒッタイト帝国の南進政策、ミケーネ勢力の東進政策、この三者の絡み合いの中から、「東地中海世界」が形成されたのだという。しかしここでは、この「三者の絡み合い」はあまり取り上げられておらず、この時代におけるエジプト、ヒッタイト、ミケーネ諸王国の内部構造の問題が主として論じられている。資料としては、前一四・一三世紀に成文化されたと推定

されているヒッタイト法典や、ビュロス出土の線文字B文書が使用されている。ヒッタイト法典の各条文の詳しい説明や、ビュロス出土の土地文書の解説は、この時代に不案内な者にも興味深いかもしれない。ただし、ミケーネ社会に関しては、著者は今までに『ミケーネ社会崩壊期の研究』その他で詳しく扱っておられるため、今回の研究では詳しくは述べておられない。

私がこの章でやや疑問を感じるのは、エジプトとヒッタイトとミケーネだけで、この時代の東地中海世界を代表させてよいのかという問題である。また、「東地中海世界」という言葉の概念規定も、必ずしも明確ではないようである。「地中海世界」という言葉が何を意味するかということ自体、大きな問題であるが、「地中海世界」の概念、及び太田氏自身のその捉え方に関しては、『史林』六一巻三号で紹介した、弓削達『地中海世界とローマ帝国』の冒頭の部分（『地中海世界』とは何か一一八頁）の中で述べられているので、合せて参考にとされることよ。

続く第二章「東地中海世界の構造変化」は、前章で論じた東地中海世界が、「海の民」の破壊活動によって崩壊してから、ヘレニズム・ローマ時代に再統一されるまでの時期を描いている。アッシリア、続いてアケメネス朝ペルシアがオリエント世界を統一し、これと並行してギリシアでは、ミケーネ文明滅亡後、アテーナイとスパルタを中心とするポリス世界が形成される。かくして東地中海世界は、以前の三極構造から二極構造へと変貌したと著者は言う。人格否定の極みである奴隸制と、全成員の自由・平等の原則という両極性これが、ポリス共同体の発展と没落の謎を解く鍵である。氏は、ポリス市民と奴隸等の従属的人民との間に政

治的共闘が存在しえなかったことは、人民の歴史的在り方の不幸であったとして、遺憾の意を表明しておられる。

この章においては、第一節「ポリス共同体の形成」において、ポリス社会形成期の概観が述べられた後、第二節「オリエント世界の統一」で、サイス朝エジプトとアケメネス朝ペルシアの社会の一断面が簡単に描写され、以下、第三節「ギリシア人の植民市建設とその結果」、第四節「スパルタの勃興」、第五節「アテネの勃興と奴隸制」、第六節「ペロポネソス戦争とポリスの危機」という具合に、ギリシア史の概説風の項目が続いている。

まず第三節においては、植民市（アポイキアー）建設の一例として、ヘロドトスによって伝えられている、前七世紀のテラ島人によるキュレネ植民が挙げられている。次に著者は、「ソロンの改革」において、『アテーナイ人の国制』などに拠りつつ、「ヘクターモロイ」と呼ばれる隷属農民の性格の検討を中心に、この時期のアテーナイにおける階層分化を論じている。第四節のスパルタに関する項において、著者は「ヘイロータイ」の階級規定の問題に、ジョンズ、エーレンベルク、ロツツェらの学説を紹介しつつ、詳細な検討を加えている。続く第五節では、古代奴隸制論が取り上げられる。アテーナイの発展の秘密が、民主政と帝国主義と奴隸制の同時発展にあったとする著者は、古代奴隸制社会論に対して否定的なフィッティングホッフの論文を取り上げて、これに反論を加え、主として農業面に限定しながらも、奴隸労働なしにはアテーナイの市民生活は成り立たなかったと結論している。（なお、古典古代社会における奴隸労働の役割を低く評価しようとする最近の傾向その他に関しては、前記の弓削氏の著作一

四九頁以下に詳しい。

第六節において著者は、前四世紀以降の「ポリス社会の危機」の問題を、アテーナイ・スパルタ兩國に関して論じている。この問題に関するグロツツ、ロストフツェフ、ウォールバンク、トインビー、ベチルカらの没落論は、わが国においても比較的よく知られているが、国内においても、村川堅太郎氏をはじめその門下の諸氏の、社会経済史の各方面にわたる研究がある。ポリス社会衰退の要因を一・二に限定することは、勿論不可能であるが、著者はここで、アテーナイ・スパルタ兩國における土地の集中化の傾向を指摘している。

この節の記述においてやや気になる点を、一・二挙げておく。その一つは、ギリシア・ポリスの衰退に関する古典的な見解は、共和政末期のローマ社会の悲惨さを、前四世紀のアテーナイに押しつけたものではないかという点である。ローマ史専攻の評者からすれば、これはむしろ逆ではないかという気がする。もう一点は、氏がアリストテレスを論拠としながら、「スパルタ女性亡國論」をこの章の中で四度（一六〇、二二〇、二二七、二二三）の各頁）、次の第三章で再にもう一度（二九八頁）繰り返しておられることである。女性に財産相続権があることと、人口減少及びポリスの衰退をイコールで結ぶことは、やや短絡に過ぎるのではあるまいか。

第三章は、「東地中海世界と地中海世界」という、少し分りにくい表題であるが、内容的には、ヘレニズム時代からローマ時代にかけての東地中海世界が扱われている。

第一節「東地中海世界の統一と分裂」においては、前四世紀の

ポリス世界やマケドニア王国に関する展望がごく簡単に述べられている。第二節「ヘレニズム世界」の第一項「ポリス世界」において、アテネ、スパルタ、デロス、クレタ、メッセネ等のポリス世界の情勢が述べられているが、それに続いて著者は奴隸反乱に言及し、ヘレニズム時代になってはじめて、ギリシアに奴隸反乱と呼べる事件が起ったが、これはローマの奴隸反乱と無関係ではなかったとする。そして、シシリー島の二次にわたる奴隸反乱をはじめ、ラウリオン、デロス、マケドニア、ボスポロス、ベルガモンの各地で起った一連の奴隸反乱の共通性が言及されている。

第二項は「プトレマイオス朝エジプト」の叙述にあてられている。著者は、ストラボンやディオドロスの記述、及び栗野頼之祐氏の翻訳・研究（『出土史料によるギリシア史の研究』）によってわが国にも紹介されているゼノン・パピルス文書等を手がかりにして、この時代のエジプト社会の特質を探ろうと試みる。プトレマイオス朝の支配機構がファラオ時代のもの踏襲に過ぎないことや、ギリシア風の文化がエジプトの土着文化の中に深くは根を下さなかったことは、今日ではむしろ定説と言えよう。プトレマイオス王国は、ヘレニズム諸国の中では比較的資料が豊富であるといわれるが、パピルスの出土が地域的・時代的にかたよっていることもあって、王国全体のヴィジョンを描くことは非常に困難である。著者も記しておられるように、現在のところ、ファイユム地方の農業事情が明らかになりつつあるが、その他の地域の事情は、まだ闇におおわれていると言っても、過言ではない程である。また、著者は農業と土地問題に叙述の中心を置いておられるが、プトレマイオス朝において、アレクサンドリアを中心とする

貿易・商工業がさかんであったことは、周知の事実である。この問題に関しては、ロストフツェフの今なお色褪せぬ数々の研究に加えて、最近ではフレイザーのプトレマイオス時代のアレクサンドリアに関する詳細な研究も定評を得ており、考古学上の調査と相俟って、今後の研究の発展が期待されている。

第三項「セレウコス朝アジア」においては、「ラオイ」の地位がヘレニズム時代に急激に変化したかどうかという問題が論じられているが、ギリシア・ポリスに編入されたことによってラオイの地位が向上したとするターンの古典学説が、今日では修正を要することは、疑問の余地がないであろう。

次に第三節「地中海世界の統一とローマ帝国」に入ると、先の第二節と同じく、再び「ポリス世界」「エジプト」「アジア」の順で叙述が繰り返されるが、いきおい叙述は短く、特定の社会相の点描にとどまっている。

最後の終章においては、七・八世紀のビザンツ農民法について軽く触れた後で、著者自身がこの研究を通じての自己の「理論的到達点」なるものを十二条にわたって箇条書きにしておられ、著者の自信の程がうかがわれる。

三

前にもことわっておいたように、この本は通史的な体裁をとっていて、個別のテーマを深く掘り下げてはいないために、細部に立ち入った批評をすることは出来ない。それで今は、全体を通して感じた疑問点を二・三挙げるに留めたいと思う。

まず、この本のテーマと叙述内容の関連の問題である。『東地

中海世界——古代におけるオリエントとギリシア——』というタイトルの意味は、私には、この副題が全編を通じて、余り積極的な意味を持っていないように思えてならない。「オリエントとギリシア」という副題を冠する以上は、古代の東地中海世界において、オリエントとギリシアという二つの異なった文化圏が存在し、その両者の対立ないしは融合の相互関係の中から、「東地中海世界」という、時間的・空間的に限定された、一つの歴史的世界が形成されて行く過程を叙述するのが、普通のやり方ではないだろうか。ところが著者は、この書物の中で、常識的にはオリエント世界とギリシア世界の係り合いの最も顕著な現われと考えられる、ペルシア戦争やアレクサンドロス大王の遠征にもあまり触れておられない。土地の所有形態や、支配・隸属関係、共同体の問題等が歴史学上の重要問題であることは、誰しもが認めるところであるが、だからと言って、各国（地域）における内部構造のあり方を個別に論じただけでは、一つの新しい歴史的世界の形成を論じたことにはならないのではあるまいか。

著者の立場からすれば、視点が社会の内部に向くのは当然かもしれないが、このようなテーマを選ばれた以上は、もう少し外部との交渉をも考慮されるべきではないだろうか。第一、私たちは何故に古典古代を「地中海世界」と呼ぶのであろうか。それは、地中海を通じての交渉によって、その周辺地域が一つの有機体に統合された時代であり、交易路としての地中海の役割が最も大きくなった時代であったからではなかったか。それならば、古代地中海世界を語る際に、貿易や文化交流により多くの比重がおかれてもよいのではないだろうか。たとえて言うならば、エジプトに

において穀物がどの様な形態で生産されたかということとは、勿論大
 事な問題であるが、そのエジプト産の穀物がどこへ輸出され、そ
 してそのことが地中海世界全体の経済生活や勢力関係にどの様な
 影響を与えたのかということもまた、重要な問題であろう。

第二に、三段階の時代区分であるが、これはあまり成功してい
 るとは言えないように思われる。三段階に区分する以上は、各時
 代の相異が明確に表明されなければならないと思うのであるが、
 今回の場合、それは必ずしも明らかではないのである。エジプト
 を例に取ると、この本では「ヒクソスとエジプト社会」、「サイス
 王朝下のエジプト社会」、「プトレマイオス朝エジプト」、及び(ロ
 ーマ時代の)「エジプト」と四回にわたって記述が繰り返される
 のであるが、古代エジプト社会の本質がこの全時代を通じて大き
 く変化はしなかったとするのであれば、このように分けて記述す
 る必要はないであろう。とりわけ、プトレマイオス朝時代とロー
 マ時代に関しては、今回のように対象を社会経済史に限定する限
 り、分けて書くことの方が困難であろう。著者の興味が、共同体
 や土地所有形態、奴隸制という特定の制度の変遷にあるのならば、
 この様に同時代の各国を並列的に叙述するよりは、各地域を通時
 的に叙述する方がよいのではないかと思うのであるが、いかがで
 あろうか。

なお、巻末に挙げられた参考文献は、初心者にとってよい手引
 となるであろうし、また索引も、「一般索引」と「資料索引」の
 二つに分れていて利用しやすい。

(B6判 四七六頁 一九七七年一月 岩波書店 一九〇〇円)

(京都大学大学院生)

青山吉信著

『イギリス封建王制の成立過程』

富 沢 靈 岸

さきに『アングロ・サクソン社会の研究』なる大著において、
 アングロ・サクソン社会の基幹的階層たるチェオルルの分析を中
 心に、イェシース層、奴隸層を解明して早期アングロ・サクソン
 社会の基本的特質とその発展過程をまとめられた青山吉信氏が、
 それにつづく後期アングロ・サクソン期、ノルマン・コンクェス
 ト期について、この度びは、イングランドの集権的封建制の秘密
 を解明せんとする意図の下に大著『イギリス封建王制の成立過
 程』を上梓された。われわれは、この二大著において青山史学の
 全貌を眼のあたりにすることが出来ることとなったが、前著『研
 究』はいわば青山史学の下部構造を、この度びの大著はその上部
 構造を構成するものであるといえよう。日頃、研究会などにおい
 て著者から親しく御教示をうけている筆者には待望の書であり、
 文字通りわが国イギリス中世史学の一つの頂点を示す力作である。
 この大著は、著者の緻密な研究、正確な理解、明晰な視点を反映
 しているが、そこに網羅されている史実、史料は、サクソン史研
 究に必須のものをすべておおっているといっても過言ではなく、
 したがって二大著を通じて四〇頁に及ぶ索引は、正しくサクソン
 史研究の恰好の辞引となっているといえる。人文系の学問におい
 ては後進者が先達の成果を出発点とすることは出来ないが、しか